

【特 集】

「現場と研究の橋渡し」にあたって

藤井慶輔¹⁾・永田直也²⁾

“Bridging the gap between the field and the laboratory”

Keisuke Fujii, Naoya Nagata

今回、本学会誌で初めての「特集」を企画した。記念すべき最初のテーマは、「現場と研究の橋渡し」である。改めて言うまでもないが、このようなテーマが設定される背景には、スポーツ現場の活動と学術研究活動にギャップがあることに起因する（研究活動を知る人なら、その研究が現場の活動に本当に役立つのか、と一度も疑問に思わない人はいないだろう。簡単に言えばそれが「研究と現場のギャップ」である）。バスケットボールの現場では、試合に勝つことや、学生チームであれば選手らの成長を目的とすることが多い。一方、学術研究では、注目する研究課題に対して、（特定のチームや選手に関してではなく）一般的な意味で新たな事実や方法、主張などを明らかにすることを目的とすることが多い。もちろん、現場での活動だけでも競技は成り立つが、一般的な意味で新たな事実や方法、主張を示すことは、多くのチームに当てはまる知見を得られるため、競技そのものに貢献できる。しかし上記の性質上、お互いの目的「だけ」を突き詰めていけば「現場と研究のギャップ」が生じるのは必然で、現場と研究の橋渡しが難しい原因の1つと考えられる。

本テーマが簡単には解決しないことを承知の上で、今回の特集では、この問題に取り組む複数の人を紹介しながら、様々な角度から考えてみたい。そこでまず、「現場」に関わる「研究者」である徳山大学の水崎佑毅先生と東海大学の小山孟志先生に、それぞれご専門

となる研究や現場との関わりについて論文を寄稿して頂いた。そして最後に、研究に深く理解を示す現場の第一線で活躍する指導者である、東海大学の教授で男子バスケットボール部監督の陸川章先生に本テーマに関するインタビューを行った。

水崎先生は、徳山大学の教員としてシュート成功率向上に関わる研究活動をされながら、日本パラリンピック委員会の医・科学・情報スタッフとしてパラアスリートの心理サポート活動を行われている。今回は、Quiet Eye と呼ばれるシュート成功率を高める特徴的な目の動きの研究について解説して頂いた。小山先生は、東海大学の教員として競技中の動きや負荷を客観的に評価する研究活動をされながら、同大学男子バスケットボール部のストレングス&コンディショニング (S&C) コーチとしての活動も行われている。今回の論文では、心拍計や加速度計などのウェアラブルセンサを現場の競技中に装着して計測を行い、選手の動きや負荷を評価した研究や、それに至るまでの発想や関連する研究について解説して頂いた。

東海大学および各年代の代表で指導実績があり、大学教授としても勤務される陸川先生にインタビューを行った理由は、研究に深く理解を示す現場の第一線で活躍する指導者の話を聞くことで、異なる観点から「現場と研究の橋渡し」を実現するためのヒントが得られるのではないかと考えたためである。筆者（藤井）が過去に共同研究を行った経緯もあり、ぜひ一度本テ

1) 名古屋大学大学院情報学研究科
Graduate School of Informatics, Nagoya University
2) 慶應義塾大学体育研究所
Institute of Physical Education, Keio University

マについて詳しく話を聞いてみたいと思い至り、インタビューを行った。論文を寄稿して頂いた上記の小山先生との対話も含まれており、同じチームの監督とS&Cコーチが学術研究やチームビルディングについて話している記事は、これまで筆者らは見たことがない。

本特集のテーマは壮大であるため、1つ2つの例で実現された、とは決して言えないだろう。これは特集が完成に近づいてから気づいたことであるが、「現場と研究の橋渡し」について多様な方法が存在する。今回紹介する形とはまた別の方法でこの橋渡しを実現することも可能であり、その多様性が重要だと考えられる（詳しくは陸川先生のインタビューの編集後記にて）。上記で言ったように、自分の領域の仕事だけを行っていれば「現場と研究のギャップ」が大きくなってしまいが、本特集が読者の皆様にとって新たなアイデアを与え、様々な方法で少しでもそのギャップを埋めることができれば幸いである。（藤井・永田）